

ISSN 2186 – 3989

## 外国学会発表報告

The 29th Princeton Japanese Pedagogy Forum

2023年5月4日(木)～5月9日(火) プリンストン(アメリカ)

国際交流センター 横田 隆志

北陸大学紀要  
第56号(2024年3月)抜刷

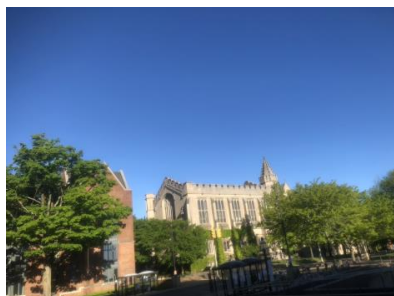
## 外国学会発表報告

### The 29th Princeton Japanese Pedagogy Forum

2023 年 5 月 4 日 (木) ~ 5 月 9 日 (火) プリンストン (アメリカ)

国際交流センター 横田 隆志

発表題目：社会につながる日本語教育での教師の省察について



2023 年 5 月 6 日にアメリカ・プリンストン大学で開催された The 29<sup>th</sup> Princeton Japanese Pedagogy Forum に参加した。

プリンストン大学と石川県は共同で日本語や日本文化を学ぶ「プリンストン・イン・石川 (PII)」というプログラムを実施しており、長年、交流を行っている。このプログラムは、プリンストン大学の学生をはじめ、アメリカ各地の大学から約 50 名の大学生や大学院生が石川県に来て、約 2 か月間ホームステイをしながら日本語の授業や日本文化体験を通じて日本を理解するものである。1993 年から始まり、2023 年で 30 年も続いている歴史あるプログラムである。北陸大学の学生とも 2020 年からはオンラインでの交流を実施し、2023 年には実際に北陸大学に訪問し、学生との交流活動を行っている。

私自身もプリンストン大学の教員とは石川県国際交流協会でのワークショップやカナダでの日本語教育の国際大会などを通じて交流もあったため、プリンストン大学を訪問してみたいと思っていた。そこで、2020 年に Princeton Japanese Pedagogy Forum に応募し、発表が採択された。しかしながら、新型コロナウイルス蔓延のために開催が中止になってしまった。その後も発表は採択されたものの、フォーラムはオンラインでの開催だったため、プリンストン大学を訪れる機会がなかった。そのため、今回の訪問が初めてのプリンストン大学の訪問だった。

初めて訪れたプリンストン大学は初夏の時期であったが気温が低く、肌寒い日であった。学会が始まる前に 2 時間ほどキャンパスを歩きながらいろいろなものを見て回った。静かなキャンパスは自然豊かで、リスなどの野生動物が自由に駆け回っていて、どこかの公園を散歩しているような感じだった。また、石造りの建物は伝統を感じさせ、アメリカ東海岸にいたことが実感できた。

今回の The 29<sup>th</sup> Princeton Japanese Pedagogy Forum でのテーマは「ことばの教育と内省 振り返りからなにが得られるのか」であり、省察をテーマにした多くの発表があった。まずは、YYJ (NPO 法人 YYJ・ゆるくてやさしい日本語のなかまたち)の奥村三菜子さんによる「ことばの教師の内省と変容 ―「わたしの棚卸し」

のスメー」というタイトルでの基調講演があった。そこでは、内省を実行することの大切さについての話があり、教師がなぜ内省を行うのかを改めて考えることができた。また、多くの内省についての研究発表から内省の必要性やその方法についても考えることができた。

今回は「社会につながる日本語教育での教師の省察について」というタイトルで発表した。この研究は、4年生の日本語科目で実施した「社会につながる日本語教育」で教師はどのような省察を行っていたのかを明らかにすることを目的としたものである。この社会につながる日本語教育では、学習者が教室外の人々と協働でコミュニティの問題について考え、どのように解決したらいいかを県立図書館で実際の社会に向けて提言するという実践を行った。この活動には多くの人々がかかわり、学習者や学習者と一緒に問題を考えた参加者にコメントを書いてもらった。また、図書館で発表を見た偶然の参加者からもコメントももらうことができた。そして、日本語教師による研修の際にはこの実践について同僚からのコメントももらうことができた。それらのコメントや実際の教室活動から教師はどのようなことを考え、どのような省察をしているのか、教師のフィールドノートに書かれた省察の分析を行った。この研究は、私自身のフィールドノートの分析を私自身が行うものであったが、フィールドノートに書かれたものを分析するというで自分自身を客観的に分析することができた。また、発表の内容に関しても多くの質問やコメントをもらうことができ、今後の実践に生かすことができる多くのヒントを得ることもできた。

来年度は、記念大会となる30周年の大会であるため、さらに多くの日本語教育関係者が参加すると思われる。異なる環境で「日本語を教えること」という共通の活動を行っている世界のさまざまな日本語教師との交流をするために、是非、参加したいと思っている。

